



炬火を掲げていざ謳う

No.71



我々の泉鳥取

2024年2月27日(火)

編集 泉鳥取高等学校閉校記念事業実行委員会

大阪府阪南市緑ヶ丘1-1-10

<https://www.osaka-c.ed.jp/custom91.html>

忍び寄るバブル崩壊

平成3年～4年

平成の初め、日本は空前の好景気に沸きました。円高が進み、金融が緩和され、不動産の価値が急激に上がりました。東京23区の土地購入価格でアメリカ合衆国全土が買えるという話が出たり、ゴッホの「ひまわり」が超高値で落札されたり、510万円を越す国産車が登場したりしました。しかし、この好景気は銀行を中心にした投資の過熱が原因で、のちに「バブル景気」と呼ばれました。バブル景気とその崩壊は、この学校でも無縁ではありませんでした。

泉鳥取高校では、1期生卒業の頃から新規求人開拓を教職員全員で行い、飛び込みセールスのような企業訪問を重ねていました。10周年を迎えるころには求人数も安定して、650～700件程度の求人がありました。しかし、昭和から平成に移り、バブルに突入すると、高校に求人が押し寄せました。最も求人が多かった年が、平成3年(1991)年でした。この当時は高校生向け公開求人がなく、すべて指定校求人でしたが、泉鳥取でも、大阪府内の求人だけで1,945件の求人が来ました。これは泉鳥取高校での最大求人件数です。他府県の求人は、封も切らずに保管していました。来客も進路部員全員が対応し、進路指導室の応接、応接室だけでは足りずに、会議室をブース分けして対応しました。1年で3,000人の来訪者がありました。当時手作業で処理していた求人票整理は限界を越え、進路部員の深夜にわたる残業で対応していました。

ところが、平成4(1992)年になると事態は激変します。求人数は半減したうえ、求人票送付後の取り消し等が相次ぐようになります。

全国規模でホテル・マンションを展開する不動産業者Aが、9月の最初に「求人票の採用条件を変えたい」と電話連絡をしてきました。「次年度は、ボーナス0カ月分、定期昇給なしにしたい」という電話でした。もうその段階では推

薦生徒の書類も発送される直前、「いったい何があったのか？」と尋ねても「業績の悪化」としか言いません。A社はバブル期住宅金融専門会社(住専)から資金を借り入れて、積極的に不動産を取得し、マンションやホテルを大量に建築していました。その土地購入資金が不良債権化して焦げ付き、銀行の貸しはがしにあったのが原因です。推薦予定の生徒を呼び出し、別の企業を紹介し、この生徒に関しては事なきを得ましたが、この会社は2003年に倒産しました。

まさに天国から地獄でした。平成5年度、求人数はさらに半減しました。泉鳥取高校は、「学校の指導に乗っていれば就職はできる」という指導モデルでしたが、就職指導で生徒を導く流れは大きく変更せざるを得ませんでした。この頃から専門学校に進学する生徒が増えていきました。



戦後の有効求人倍率(D's JOURNAL サイトより)